

■岸和田の血

中場利一(著)

中場利一さんと岸和田は、切っても切れない関係である。

1994年のデビュー作「岸和田少年感連隊」以来、中場さんには岸和田を舞台にしたヤンチャな少年たちの物語をずっと描きつづけてきた。本書もタイトルどおり、その系譜に連なる長編小説。チュンバ、小鉄、ガイルといったおなじみの面々が、あいかわらずカラ専へ、カラッと痛快に、教育上よろしくならん、とばかりやってゐるのだが、中場さんが描いてゐるのは決してそれだけではない。

「切っても切れない関係」といふのは、「切りたくても切れない関係」のことである。たとえば家族もそうだし、仲間もふるまひもそうだし、こゝろも切れないのか。中場さんは、それを「血」といふ言葉でとらえてゐる。チュンバ少年には、確かに、どよどよとつむもなへ、岸和田の血や中場家の血が脈々と流れてゐるのだ、と。

チュンバの父親は、やはり魅力的な言葉遣いをする。(あのあの、人を好きになるふう人は、

誰かをゆるし 誰かにゆるされて

その心の癖がなにも全部、まじりて好きやうにまじりてやんや〜その言葉は、じじは中場さんの小説すべてを貫いて流れてゐるのではないかな。

登場人物たちは皆、誰かをゆるし、また誰かにゆるされてゐる。頭を一発はたたきながら、ゆるす。アホがボケがカスが、と薄うきながらもゆるす。あきれはてた苦笑に交じりゆるす。

子どもがダメなおとなをゆるす。その手でも、またおとなにゆるされる。いっせえ切りたい関係でせよ、なにかにゆるされて、断ち切れないまま、だからいっせえ、自分ほこのころ……。

「優しさ」とは優しくない。母がチュンバに頭をはたかれるだつたら、それでも、さうだ、夏休みの宿題の読書感想文に困つてる連中、眺んでみなよ。たとえ感想文は書けなくても、きつとなにかが変わる。おとなもそう。変わる。本書のおとこは皆、筆端小説のような緊張感で、一文なのだが、そこをエドワーズとして読めば、おとなは胸がじんんと熱くなる……それ以上言うた、照ら屋のチュンバに本気で怒られてしまつてゐる。

評・重松清

本の雑誌社・1890円/なかは・じじい 58年生まれ。作家。「岸和田少年感連隊」「走れーッスロ」ほか。



■日本・ポーランド関係史

E・パワシユールトコフスカ、A・T・ロメル(著)

ポーランドは両側でソ連とドイツという大男が眠つていて、彼らが寝返りを打つと潰されてしまふ——一九三〇年代後半に同盟通信のワルシヤワ特派員だった森元治郎から聞かされたことがある。戦後は日波協会の設立発起人、そして長期間会長職にあった。

本書にも登場するその森の言が裏腹である書である。

日本関係はその当初は遠隔ゆえに「交流は散発的で、ほぼ文化の領域」に限られていた。しかし二十世紀に入るとロシアに對抗する同盟とつた形に進み、日本はその独立を支援し、ポーランドの政治家たちもロシア親体化のために日本の助力を期待するようになる。とくに日露戦争ではそれが顕著で、ポーランド側は日本軍がロシア軍内のポーランド人兵士に向けてロシア軍からの離脱を促す声明文を作成するのに協力している。日本はとくにポーランドはロシア・ソ連を牽制する、あるいはドイツの本音をきくるときになんとも便利な存在だといふ点

諜報から浮かびあがる国策の裏側

で結びつきを深める。著者のひとりルトコフスカは日本になんとも留意して近代日本史にとりくんだ研究者であり、多くの日本の文獻、資料にもあたっている。それゆえに近代日本の国策の裏側がはからずもポーランドといふフィルターを通して浮かびあがる。二十世紀を時間を追いつつ解説しているが、やはり庄春は第2次大戦中の日本とポーランドの戦報を通じての交流だろう。日本側は密かにポーランドの情報将校と接触を続けていた。とくにリトマニアのカウナスで、あるいはストックホルムでの日本側との情報交換、それが表面化したのが杉原千郎の「命ユタヤ人へのビザ発行や小野寺信武官からの対米戦不可の執拗な電報だ」といふのだ。

ポーランドのソ連への接近、日本のドイツとの同盟、その狭間でどうひとつの「歴史」をつくりだしていった西國の名も知られた人たちが、その風づかいが行間から聞かされてくる。それをどう受け止めるか。著者も私たちも十分な答えを見いだしてない。

評・保阪正康

柴田千代、藤澤社・9900円/EW a Palasz-Rutkowska/Andrzej Tad eusz Romer、心もポーランド人。



■河原久雄 文楽写真集

〈写真〉河原久雄 〇稿

表紙には、故 吉田玉男が人形を遣う写真。そして、「河原久雄文楽写真集」の構成、橋本治一「の文字。思わず手に取った私は、本を広げて意外な感じがしました。写真に対する橋本さんの解説が、一切無いのです。ページをめくると、しかし解説をつけないというところが、それぞれの写真への橋本さんの敬意であり称賛の意であらうところが、わかっています。」

あふれでる人形の感情 精巧な美

り、橋本さんはあいつに近づいて、高に睨つてゐる夢中でマンガを人物の声が聞こえる気がすることがそのような感覚に集。人形が木偶、そ、私たちの感情り込みやすいの人。本来は動かかな手によって動かさ真を揺られること一度静止するところ、極めて巧みな生まれてゐるので 酒井順子(エ

■座標軸としての仏教学

パーリ学僧と探す「わたしの仏教」 勝上

広告や企画制作の仕事をしてきた女性が、出家して尼さんとなる。さらに本格的な仏教研究の道に進み、原始仏教の釈迦の教えを求めてスリランカに留学し、パーリ語の経典をきく。著者の経歴を聞けば、ユニークな学僧であることは一目瞭然である。

ユニークな女性学僧の人生論

原典から釈迦の教えはわかるので、それを手がかりとながら、日本の仏教の教えも自在に理解して、自分なりの仏教をみつけたい、という。そのところが、率直な言葉遣いで書かれている。半田的仏教風思想も、ふつふしの現代人の感覚で

明されてゐるから。日本仏教は大乗の創作とされるから、の教えは何かどこの問題となつてくる。者は、原始仏教の道に大乗の考えを見つけたという。日本とアジアのエッセーとしても生論としても案。ただ、題名がな気がする。これ者手に取りたい、小杉泰(京